
春の恋

尖角

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春の恋

【Nコード】

N7935T

【作者名】

尖角

【あらすじ】

春の恋（桜の木の下での告白）を描いたものです。

好きになり、告白し、結婚までを描いたものです。

(前書き)

桜の木の下での告白…。

どうなったたらそこで告白になるんだろっ？

そう思って書きました(笑)

そんな1話です。どうぞ!!

私は桜の咲く季節、恋をした。

今思えば懐かしい。

漫画やテレビでしか見たことのなかった、桜の木の下での告白。

私はそれをした。

「結論は？」って??

話の初めに答えを言ったら面白くない…。

だから答えは最後にしようかなあ。

っと最初の件はこんなもんにして、本題に行きます…。

私の名前は、佐野小春。

この春に安城高校あんじょうこうこうに入学した。

そこで私は想う人に出会う。

その人は同じクラスだった。

初めて会ったのに、その人のことが好きになった。
容姿も、中身も、すべてが私の好みだった。

私はその人を想い続け、告白の機会をうかがった。

私は決してかわいいわけではない。

かと言って自分のことを“ブサイク”とも思っていないわけだが…。

ある日の部活勧誘の帰り道、私は遅くなってしまい愚痴をこぼしていた。

「なんであの人がいたのよ…」

ここで言うあの人とは、別に好きになった田中翔汰君たなかしょうたじゃあない。

昔やっていた空手の先輩、東條蓮琴とうじょうれんこ先輩だ。

正直、私はあの人が苦手だ…。

別に嫌いとはまでは思っていないが、苦手なのである。

何かと言って私に勝負を挑んでくるし、何かと言ってウザいのである。

その先輩が「お前空手部に入れよ！」っと何度もしつこく誘ってくる…。

しかし、私は空手が少々憎い…。

父が空手をやっていた関係で、私も空手を小さなときからやっていた。

それは別にいいのだが、小さなころからの厳しい練習のせいで強くなりすぎていた。

同じ年代の男の子ですら私には勝てず、大人でも苦戦を強いる強さ…。

そんな強さを欲しがる女の子がいるだろうか？

いやっ、いないだろう…。

だって、女の子なのにありえないほどの筋肉量。

空手をやめたのは中1だっていうのに…。

筋肉のせいで体重計に乗るのがいまだに怖い…。

だからこの春という季節はあまり好きではない。

なんて言っても、身体測定があるから…。

そんなことを考えていた時である。

「おい！」

つと後ろから声がした。

「え！？」

私は少しびっくりした表情を見せながら、ゆっくりと振り向いた。

「やっぱり、佐野じゃん！！」

つと叫び気味に言う男の子…。

私に呼びかけたのは、なんと東條君だった。

「つど、どうしたの？」

私は素すつとんきょうつ頓狂な声を上げた。

「そんなにびっくりした？」

東條君が私に聞く。

「まあ…この時間だったから…」

つとそんな感じで、私は言い訳？をした…。

すると「言われてみれば、そうだよな…」と云う東條君。

「お前はなんでこんな時間に？部活勧誘は昼からだっただけど、今5時過ぎだぜ？」

「ええ…つと…」

私は少しゴニョった。

空手をやっていたせいで、軽い細マッチョだっことを好きな人に知られなくなかったから…。

しかし、ここで突っ込んでくる東條君。

「なんだあ？」

「そんなに変な部活に行こうとしたのか？」

「それとも、ただ無駄に勧誘に捉^{つか}まっていただけ？」

「どっちなんだ？」

私の帰りが遅くなっていたのは、どっちでもない…。

確かに“無駄な”ではあったが、先輩が…。

私は正直に言うことにした…。

なんせ嘘は嫌いなもんで…（笑）

「あのね？」

「笑わないで聞いて？」

つと私がそう言つと、「座つて話そうぜ」と私を川の土手^{とて}にあつた桜の木の下に案内した。

正直、地べたに直接座るのは女の子にとってはきつい。

スカートが短いとパンツを直接地面につけることになるから…。

そんなことを思いながら、私はカバンを下敷きにして座つた。

いやっ、座ろうとしただけで、座ろうとするその前に止められた。

「ちよつと待ってくれ…」 つと…。

東條君は私をほんの少しの間待たせて、パイプいすを2つ持ってきた。

「実はこの近くにちつちやな倉庫があるんだ…」

「そこから、少し拝借^{はいせ}してきた」 つと言つ東條君。

しかし私は思った。それって泥棒なんじゃ…つと…。

けれど「泥棒じゃないからね?」「その倉庫、親戚のやってる
ところだから」っと笑いながら言われてしまった。

「なんだそうだったんだ」 っと私も笑ったが、私は心の内が見
られたようで少し恥ずかしかった。

しばらくして、空手をやっていたことや、先輩の勧誘が…と言
う話をし始める。

そんなときの話である。

『好きな人との会話はこんなにも面白いんだ…』

っと思ったのは 。

私の恋は、想いを伝える前に終わってしまっ。

そう、、初恋の卓也くんときもそうだった。

気付けば卓也君は転校していて、《告白するには時すでに遅し》
だった。

私の恋は、次の恋も、そのまた次の恋も、チャンスをつかがうば
かりで実ることは決してなかった。

そんなことを考えていたためか、私はとんでもないことを口にした。

「私、、東條君のことが好き、、」

「あっ！」

最初に驚いたのは私の方だった。

ありえない…。私が告白なんて…。

そんなことを思っているときのことである。

「いま…今好きって言ったか？」「俺のこと…」

「え？」

「……………うん」

東條君は私の頬をさらに赤く染めた…。

『どっしりおっ』

それしか考えられなかった。

そして、しばらくの沈黙が続いた。

断る理由すべを考えているのだろうか？

そんなことを思っていると、ついに東條君が答えを出した。

「いいよ…」

「こんな俺でいいならいいよ…」

「付き合おう…」

恋愛の天使というものだろうか？

はたまた、幸運の女神というものだろうか？

とりあえず、私はそんな者たちに感謝をした。

「ありがとう!」「本当にありがとう!」

っ…。

こんな感じで私たちは巡り合い、付き合うことになった。

それからしばらく…。

そうだなあ…。

何年ぐらい続いたのだろうか？

結婚したのは21の時だから…。

6年ぐらいかな？

喧嘩して、仲直りして、キスをして過ごしたのは…。

けれど、それが「翔ちゃん」の「結婚してくれ」の一言で終わっ
た…。

あの桜の木の下での告白以来、私は何かあるごとに「翔ちゃん」
と呼んでいるが、当の本人は「やめてくれ」っと笑って言っている。

自分で言うのもなんだが、そんな恋人のような関係でいられるお
かげで、私たちの家庭には笑顔が絶えない。

今は、私と翔ちゃんと、6才の太一たいちと5才の美月みつきの4人で一緒に
住んでいる。

そのみんなが食卓に着くと一層笑顔になる…。

私はそんな家が大好きです。

「ねからまよるじくね...。翔ちゃん!!」

(後書き)

終わり方がビミョーですが、春はこれで終わります。

次は夏の恋です。

シリーズですので、またUPされたら読んでやってください。
それぞれの季節で、書き方が少しずつ変えてあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7935t/>

春の恋

2011年6月12日20時53分発行